関西自然保護機構会報 19(2)：67－68，1997

巻頭言

ヒグラシと水路

姫路工業大学自然・環境科学研究所／人と自然の博物館　江崎保男

8月も残り少なくなって夜明け前のヒグラシの合唱がいつとはなくきかれなくなり，秋の虫のすだく声がこれにとってかわるようになってきた。実はごく最近まで，ヒグラシが夜明け前の時間帯，鳥が鳴き始めるよりもさらに前に鳴くものであることを知らなかった。同僚の虫の先生によるとヒグラシは典型的な薄明薄暮タイプとのこと。まさに「早起は三文の徳」である。

私が今住んでいるマンションは，裏六甲の川沿いのもともとは農村地域であったところに建っている。私ども一家が移り住んでからも周辺の田圃が次から次へと，マンション，駐車場，コンビニエンスストアへと姿を変えている。私鉄の高架線路がすぐ横を走っており，線路のむこうにはヒグラシの鳴く森が対峙している。そちらの地域は山林をニュータウンとして開発したところで，ヒグラシの森はニュータウンのなかに計画的に残されたアカマツ林である。どの方向からみてもちょっとした森なのだが，空からみるとほんの小さな緑の断片にすぎない。それでもエナガの一群とシジュウカラ，コゲラ，メジロ，ウグイスなどの小鳥が住みついていて，四季を通じてちょくちょく線路のこちら側へ飛んできては目と耳を楽しませてくれる。

マンションと高架線路のあいだにはクルマの通れる舗装路が線路と平行に横たわっている。マンションの左手300 mほどの先には私鉄の駅があって，舗装路は当然のことながらそちらの方向にむかっているのだが，駅までは通じていず，マンションからほんのちょっと進んだところで左に直角に折れてしまう。このおかげで私どもの住む一角は駅周辺のクルマの洪水からはとりあえず隔離されている。一方，駅にむかう人は舗装路が左に折れてしまっても，その先に続く小道を進むことができる。この小道は小さな水路に沿っており，対岸では毎朝おじいさんがせっせと畑の世話をし，通行人と立ち話をしている。小道はその後左へゆるくカーブし，住宅地のあいだをぬけてから再び右にカーブして駅に通じている。一方，水路は全長たかだか50 mほどで，最後には小道の途中で土管からの噴き出し水に姿を変えるのだが，その場所と様子からして，川の本流から汲み上げた水の流れであり，もともとは農業用水路として機能していたものだと察しがつく。流れの順にしたがえば，川からの汲み上げ水として忽然と現れた水路は，住宅地のなかを雑排水を取り入れながら進み，舗装路につきあたる直前におじいさんの畑に水を供給する役目を果たしていることになる。この後，舗装路につきあたったところで水路は地下にもぐり，再び地上に現れた時には舗装路脇の側溝に姿を変えている。この側溝には常時水が流れているのだが，その水がおじいさんの畑の横を流れる水路からきていることを意識している人は，もともと農家であった地元の人たちを除いて少ないだろう。

駅よりもさらにむこうに位置する小学校に通う子供たちは，毎朝この水路沿いの小道をたどるのだが，おじいさんの畑をすぎたところで右に折れて水路をまたぎ，畑の横の斜面を高架線路の方向にむかって一気にかけ上がる。そこを今度は左に

折れると，線路にそって藪におおわれた小道が現れ，水路の小道を最後まで行くよりは一段と近道ができるというわけである。藪の小道と水路の小道のあいだは大きなヒマラヤ杉が何本も植わった庭となっていて，道端の藪といっしょに，広くはないものの鬱蒼とした空間をかたちづくっている。ここにはヒグラシの森からしょっちゅうシジュウカラが通ってきているし，冬場はアオジの「チッ，チッ」という声をひんぱんに耳にする。ただし，このヒマラヤ杉の庭と藪は，マンションのベランダから駅方向の見通しをさえぎっており，学校にむかう子供たちは，畑の横の斜面をかけ上がり藪の小道に入った途端に視界から消えてしまう。

ヒマラヤ杉の庭とおじいさんの畑は，実はもうない。今年の２月，これらはアスファルトの舗装路に姿を変えた。マンションの界隈と駅とが，ほぼ直線状にのびた立派な道路で結ばれたのである。このためにクルマで駅のほうへ出るのに，ぐるっと迂回する必要はなくなったし，マンションから駅方向の見通しはぐっとよくなり，毎朝学校にむかう子供たちの姿は駅の近くに達するまで見届けることができるようになった。この道路整備のあと須磨の小学生殺人事件がおこったわけで，マンションの住人のかなりの部分はこの整備を歓迎したに違いない。一方，この便利さと安全性(?)の引き換えとして失われたものは，急速に都市化が進むこの地域の片隅にいずれもささやかに残されていた，景観の複雑さであり，動植物にとってのハビタートの多様さであり，おじいさんの畑を中心とした住民間のコミュニケーションであった。

道路整備にともなって水路も姿を消した。工事がはじまると，駅へ行くのに藪の小道を利用できなくなり水路の小道をとるようになったので，水路のなくなるいきさつをおおかた，この目でみることができた。それはいとも簡単なことだった。土管の噴き出し口にさらに土管がつながれ，水はそのなかを流れるようになり，水路のなかには土管の連続のみが寝そべっている，そんな奇妙な光景がしばらく続いた後，上から土がかけられ水路は完全に姿を消したのである。そんなわけで，マンションの前の舗装路の側溝には今も絶えることなく水が流れているのだが，それが何物なのか，どこからきてどこへいくのか，知るすべもなくなったのである。

こうして今年になって，私の住む地域の人々は１件の道路工事によって，一見ささやかだが大切な多くのものを失った。ただし，はっきりと姿を消したいくつかのものにまじって，おそらくは失われたことさえ人々の意識にのぼっていないものがある。それは，ほんのわずかの距離しか流れていなかった水路が私たちに与えてくれていた，地域の水の流れについての情報である。思えば，この数十年間にこの国で急速に進んだ都市化・近代化とは，人々を自らの生命と生活の根幹にかかわる数々の重大情報から遠ざけることだったのではないだろうか。今や人は自らの命を支える水と食料がどこでどのように生産され，手元にとどけられるのか，あるいは自らが排出した汚物と大量のゴミがどこへ行くのかについてさえ，多くを知らないし知ろうともしない。人が今なお，そして永久に自然の生態系に依存して生きているというごくあたりまえの真理に照らせば，このことは，人がその生存のために保ち続けなければならない自然との絆を，自ら次々と断ち切っていることを意味する。自然との絆を断ち切ることが，人と人との絆を断ち切ることにつながっていることもまた間違いない。

ヒマラヤ杉の庭とおじいさんの畑，そして水路はなくなってしまったけれど，ヒグラシは来年の夏も夜明け前に合唱をきかせてくれるであろう。私はヒグラシのことをよく知らなかったが，ヒグラシについて無知であったのと比較にならないくらい大切なことについて無知であるという現実を，水路が消え去るその時まで知らなかったことを恥じている。